昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七七号）

慈光

第二十四巻　第六号

目次

深心について……近角常観……(1)
信仰と知性……福島政雄……(7)
信の旅の一里塚……林田英夫……(13)
念仏詩抄……木村無相……(17)
浄土について……花田正夫……(20)
「歎異抄と私」の視聴記……北岡行男……(23)
森田正勝……(24)

深心について

近角常観

「深心というは即ち是れ深く信ずるの心なり、また二種あり。一には決定して深く自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して出離の縁あることなしと信ず。」

これは善導大師の切実な罪悪の懺悔であります。『歎異抄』の中にもこの文が引いてある。しかし、そのことはあとにして、先ず一字々々についてこの文を味いたいと思います。漢文にすれば字数わずかに二十余字であるが、無限の味いが存するのであります。

はじめに「深心というは即ち深く信ずる心なり」で、深く信ずるの心である。浮いた、浅い心でないと言われた。実にありがたい言葉です。

次に「決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」一字といえども浮いてない。「決定して」としっかりと言われてある。

今日の信仰を言う人達は、多くは決定など出来ていない。「こう思うと自分が悪いが、しかしこう思うのも無理がないな」等と、自分で活かしたり死なしたりしているのは決定とは言えぬ。決定とは百千万貫の力で断定するのです。

さて如何に決定するかというに「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫と決定するのです。罪悪生死は人の上ではない、自分の上である。人も自分も、人間はみなそうだなどと思うている間は、真に決定することは出来ぬのです。

信仰は無論、だれでも信仰が無くてはいかぬ。けれども信仰はみんな合いの事ではない、各自々々に得べきものである。現に私如きは信仰が無ければ世に生きて居られぬ。もし無かったら今頃はどうなっていたかわからぬと思います。信仰は各自々々の一人しのぎである。自分自身が「現にこれ罪悪生死の凡夫」なのであります。

われわれは苦悶している間は、自分は罪が深い、非常な

る罪悪を犯していると思うているが、一度び苦悶が去れば全く忘れているのです。

善導大師は、力強く「現に」と云われた。罪悪を感ずるのは現にでなくてはいかぬ。我々はかって罪悪をおかした、或は時によると罪悪をおかし得る位に思うているのはまだ浮いているのです。例えばここに人を殺した人があるとする。今我々がその人のことを思うにしても、若し自分に信仰が無く、仏陀の御恵みが無かったなら自分も人殺しを何程やっているかも知れぬ。また今は殺していないが如何なる事ありて人を殺さぬものでもない、と自分もその人と同じであると感じて、はじめて真実に罪悪を感じるのであります。しかし我々は現に人を殺したと同じ様に思えるかというに、それが出来ぬ。常に人の事とのみ思うているのは誠に浅間しい次第であります。

しかし、我々の罪悪は現にである。なるほど心の中では親を殺し、子を殺し、世間のすべてを殺しているのである

「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」

とは如何にも人生より動かぬ一言であります。殊に大師は、罪悪生死と言われている。罪悪と無常とを並べあげてあります。生死無常は何人ものがれることの出来ぬ、最も明かな問題であります。

しかるに我々はこれを知りつつなお自分の上にはこの大問題は無きもののごとくに思うてはかない生活をむさぼっているのです。

親鸞聖人は

明日ありと思うこころの仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは

の古歌を引いて、明日を待てずに出家せられた。

又、承陽大師、道元禅師は、親の臨終となり、屍の枕頭の香の煙りが、しばし連続しては末は消えていくのを見られて、人間も香煙のように一度消えればそれきりであると深く感じ、仏道に入られたということである。

或は白隠禅師は、さる武士と花見に行って滝壺を見ると、滝壺に泡が出来ては消え〳〵するのを見て、急に菩提心をおこしたと伝えられます。

すべてかように、少し心を止めて見れば人はことごとく無常である。これを感ぜずして平気でいる者が果してよいのであろうか。これを感ずる者は神経過敏であると云うかも知れぬが、いずれが本当だかわからぬ。生死無常は何といっても人生の事実である、念々刻々、何時われわれは死ぬかも知れぬのです。人生は生死無常、我々は現に其境に沈淪しつつあるのであります。

次には「……曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あること無しと深信す」とある。これが実に力強い御文です。

今いうように我々は現に罪悪生死の境に迷いつつあるのであるが、これは今がはじめかと前方を見るとなかなかそうでない。実に曠劫以来の長の流転であります。しかし前生とか輪廻とか思う時は、何か知らぬと直ぐに理屈を考えたくなる。さりながら、この説の如何などを考うるよりも——学説如何などを考えて居っては何時まで経っても解かる時はないのです——それよりも、今現に我々の生活が泡の生活、煙の生活である。今我々は目のあたり罪悪生死の境に坐しているのであると、自分一人になって其境に立って見れば、曠劫已来の大流転は理屈離れて、直覚的に解かって来るのです。

煙の立つのは、今はじめて立つのではない、昔から立っていたのである。年々歳々花は同じように萎んでは咲き、咲いては萎んできた。我々は曠劫の昔よりこのかた現に今日今時まで、常に没し常に流転して来たのであります。

さて、それでは今後に一点の希望でもあるかと云うに、「出離の縁あることなし」と断言せられてある。

これが真の人生の有様であります。ここにおいて我々は最早や一縷の手懸りもない、実に罪悪の塊りである、無常の極である。

我々はかくの如き者であると決定して深く信ぜよと仰せられたのであります。善導大師の深信の文は、至って簡単であるが、実にありがたい。一字一句といえども動きのない力強い文である。これをいずれの点より伺っても、尽きぬ味をいただくことが出来るのであります。

なおこの文を一括して言えば、我々に一条の活路でもある時は、決して深信は出来ないと言うのであります。自分の力で善が出来る、自分の力で生死をまぬかれることが出来る、自分の力でかくも出来るという考えのある間は、決して深信は出来ぬ。決定して深く信ずるとは、どうしても動かれないという極に達してはじめてあらわれて来るのであります。

善導大師は、このあとに二河の譬喩を説かれてある。すなわち、人ありて無人空曠のはるかなところに来た。これは一人の善知識もないことを言ったのです。その人四方を見るに一物もないとは、われわれが曠劫已来流転の有様です。

その何も無いところに突然群賊悪獣があらわれて、この

人の単独なるを見て競い来りて、この人を殺そうとしかけた。絵で見ると、一方には虎蝎等が来り、一方には槍刀を持った群賊があらわれて、この人を攻めかかって居ります。この人は仕方なしに、一方に逃げようとすると、忽然として大河に出た。その河は南北にひろがってはてが見えない。しかも北の河は火の河、南の河は水の河である。この人群賊悪獣の災禍をのがれようとすれば、是非ともこの水火の中に進まねばならぬのである。

ここにおいて、この人自ら思うには

「この河南北に辺畔を見ず。中間に一つの白道を見る。極めて狭小なり。二つの岸相去ること近しといえども、何によりてか行くべき。今日定めて死せんこと疑わず。正しく至りて帰らんとすれば群賊悪獣、漸々に来り攻む。正しく南北に走り去らんとすれば悪獣悪虫競い来りて我に向う。正しく西に向いて道を尋ねて行かんとすれば、また恐らくはこの水火の二河に墜せんことを。時にあたりて惶怖（こうふ）することまた云うべからず即ち自ら思念すらく、我今帰るともまた死せん、住するともまた死せん、行くともまた死せん、一種として死をまぬがれず」

とあります。

人生はどうしてもこの境で一度行きつまる。しかしてこの行きつまりの境は必ず一度は来るのであります。

さてこの悪獣とは何かと云うに、実に我々の罪業である我々はたちまちにして怒れる虎の如く、忽ちにして人を恨み人をねたむ蛇の如くであります。又悪獣とは、自分の身体とか生活とか、およそ我々の身上についての一切の欲である。それが自分を常に攻め立てて苦しめるのである。

又火の河とはわれわれの瞋恚をあらわし、水の河とはわれわれの飽くことを知らぬ貪欲心を示したものであります。

貪欲の浪、瞋恚の炎は、常に我々の内心をおかしてしばらくも止む間もない。しかして、我々の生命は今まさにここに尽きなんとしているのである。気付いて見れば、如何にも我々は危険千万に臨んでいるのである。これが即ち、現に罪悪生死の凡夫の有様なのであります。

ところでその罪悪生死の我々の上にどうして救いの道が開けるかというに、これは自分で求めて開けるのではない道とあるのは、仏陀廻向の信心の一道である。この道はかくの如く我々の罪極まり、力尽きた最後にはじめて我々に光を放って下さるのであります。これは実に信仰上、罪悪観の味の存する点で、最もよく味わうべき要所と思いま

す。しかしその味は、二河の譬喩にもっとも明かにあらわれて居るのです。

さてこの人は、今は一種として死をまぬかれることは出来ぬ。いよいよ絶体絶命の極である。遂に最後の決心をきめました。曰く、

「されば、われむしろこの道をたずねて、先きに向いてしかも行かん。すでにこの道あり、必ず度すべし」

と。しかるにこの人、この念をなしたる時、たちまち東の岸に人の勧むる声を聞き、西の岸に人の招く声を聞くのです。

全体、この勧むる声も、呼声も、昔からあったが、今までは聞えなかったのである。それが信じた時にはじめて気がつくというのです。四方八方、今は一条の活路も無い、唯河の中間に一条の細道がある。すでにこの道あり、必ず行けると、一念気のついた時に、東の人の声が聞えた。

「君、唯決定してこの道をたずねて行け。必ず死の難無けん。若しとどまらば必ず死せん」

と。又西の岸の人呼ばうて言く

「汝一心正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に堕せんことを恐れざれ」

と。此処でこの人は

「この人すでにここにつかわし、かしこに呼ばうを聞いて、即ち自ら正しく身心にあたりて、決定して道をたずねて直に進んで、疑怯退心を生せず」

と、猛然として出立し、遂に西方の彼岸に到着したと言うのであります。

どうも、この自分は実に仕方の無い者、手懸りのない者無有出離之縁であると、絶望の極みに沈んで、救済の声を聞いたという味いは、到底言舌をもってあらわすことは出来ませぬ。

今一例を取って言うならば、今日多くの人が苦しむというは、自分で自分の罪悪をつぐなおうとして居るのである。何とかして新たなる人間となりたい、善い人間となりたいと悶えているのである。悪く言う時は信仰を求めるにしても、自分が善い者になろうがために信仰を求めているのである。それだから何時までも信仰が得難いのです。自分で自分が助かろうと思っている間は、まだ真実に自己の罪悪を知ったのではない。今殺されるという人が、自分は今殺されると聞いて、どうにも仕方がないと極まった時に、道は前に来てあるのである。しかしてその道は即ち信仰の一道なのであります。この世界に仏陀の教がある、宗教の安心があるということは、何も我々が今日はじめて聞

いたのではない、生れ落ちたか時らすでに耳の酢ぱくなるほど聞いて居ったのである。

さりながら、今日までは真実にその道に行く気がなかったから解らなかったのです。

さて、今仕方がないとなって、残るは唯この一道である。すでにこの道がある、必ず行けるに違いないと決心した時に、東の方に人のすすめる声が聞えた。声というのは大聖釈尊が、この土で信仰をお勧め下された声である。この声は、実に二千余年の昔から響いてあったのです。けれどもそれが今日まで我々には聞えなかった、聞こうともしなかったから聞えなかったのである。

するとまた、西の岸の上に人ありて呼ばうて曰く、

「汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん。水火の二河に堕せんことを恐れざれ！」

と。実にこれです。これが仏の御呼び声である。ここがありがたいところであります。

そこで、今の「深心釈」の次に何とあるかと云うに

「二には決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂取して、疑いなく、慮（おもんばかり）なく、彼の願力の道に乗じて定めて往生を得と信ず」

とあります。

これは、はじめの「――出離の縁あること無しと信ず」というのとは、全くうらおもてで、懺悔の極が、この確信にあらわれて来るのです。これで二河の譬と全く一致する。二河の譬において、西岸上の「汝一心正念にして直ちに来れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に堕すること恐れざれ」という呼び声は、すなわちこの仏陀の願力を示されたのであります。（明治三九年「求道」三巻五号）

盤珪法語

僧問。古来の祖師、難行苦行にて、大悟大徹す。今日和尚も種々難行の上にて、大法成就し玉うと承わる。我等如き者、修行もせず悟もせず、只このままにて不生の仏心と覚悟しては落着き申さず。

師曰。譬は往来の旅人、高き山の峯を通り水なき所にて水にかわきし時、一人遙かなる谷え水を尋ね行き、ここかしこ骨を折りて尋ね求む。漸く水を得て帰り、衆人に飲ましむるに、骨折りなしに居ながらに飲む人も、骨折る人同然にかわきはやむにあらずや。疑いをなし水を飲まざる人のかわきはやむべき様なし。身どもは明眼の人に逢わざる故に、誤て骨を折り、漸く自心の仏を見出し、各々え難行なしに自身の仏を申し聞かせ知らせる所が、居ながら水を飲んでかわきのやむが如し云々。

信仰と知性

福島政雄

一

仏教で信仰と言えば仏陀を信じ仰ぐことである。仏陀というのは覚者（かくしや）と言って、悟りを開いて迷いを去り、心の眼が覚めた人のことである。それで仏教の信仰では知性が重要なはたらきを為すものである。

釈尊の成道を考えて見れば此の事ははっきりとわかる。お経を読めば悪魔の大軍が攻め寄せて来る有様が書かれてある。悪魔とは何であるか、煩悩のことである。身を煩わし心を悩ましめるものである。貪、瞋、痴、慢というようなものが煩悩である。

菩提樹下の場面ではそれは面白い姿で描き出されている虚空に充満する魔軍の中には大樹を戴いて手に金の杵を執るものがある。大樹というは将軍を意味するから、大樹を戴いているというのは、盛んに権力欲に燃えているということである。手に金の杵を持っているというのは財産欲でかたまっているのである。或は色々の獣の形をしたものがあるというのは、獅子は倣慢、狼は貪欲、狐は狡猾というようなことであろう。一つ目の悪魔というは物を見るのに一つ見方だけするというのであろう。その反対の目が沢山あるというのは、妄りに多くのものが目につくというのであろう。大腹長身というのは、どこまでも飽くことのない貪欲の姿であろう。身体から烟や焔を放っているというのは、瞋恚の姿である。唇が地まで垂れているというのは、愚痴の姿である。蛇を身にまとうているのは嫉妬の姿である。空中にぐるぐると廻っているというのは、頭ばかりがはたらいて空想の世界にいることである。

このように描き出されてある様々の姿は、釈尊の成道せられようとする知性に照らし出されている煩悩の姿である仏陀の悟りを開かれるその知慧の光が煩悩の世界を照徹するのである。煩悩が煩悩として観照せられるのである。

二

知性が煩悩を煩悩として観ずるというのは、知性のはたらきのないところでは煩悩を煩悩として見ることが出来ないのである。恋愛に迷うている者には恋愛はただ美しく感

ぜられる。恋愛も煩悩であるとは思われない。併し知性の光に照らされて来れば恋愛は貪欲の一つの姿であることがわかる。すべての煩悩が煩悩としてはっきり底まで見とおされて来るところに知性の光はかがやく。仏陀の智慧はこのようなはたらきをするのである。煩悩が底の底まで見とおされて来れば、煩悩はもはや煩悩ではなくなるであろう。釈尊の悟りの眼の前には一切の煩悩が転ぜられてもはや煩悩ではなくなる。

法隆寺の金堂の四天王にふみつけられている悪魔の姿を見れば実に面白い。悪魔はもはや悪魔ではなく、馴れた犬のように親しい姿を示している。四天王も妄りに威圧してはいない。悠々として悪魔を踏んでいる。悪魔を征服しているという有様ではない、悪魔を手なずけているのである。

ゲェテのファウストのはじめのところに、ファウストが地の霊を呼び出す場面がある。ファウストは魔法を使って地の霊を出現させるが、ファウストはその地の霊をおそろしいものと感じている。地の霊をまともに見ることも出来ない。この地の霊については色々の解釈もあろうが、これを全煩悩と考えて見れば興味がある。空虚な学問の世界に没頭していたファウストには、地の霊のおそろしい煩悩の世界を直視することが出来ない。そこにファウストの将来が予示されている。ファウストは此の夜、煩悩の世界に突入してさんざんの破滅の体験をするのである。

釈尊はその正反対である。成道（じようどう）の釈尊は地神を呼び出される。地神を呼び出して一切の煩悩を統一せしめられる。すなわち地の霊はその全煩悩の姿を以て釈尊の命令に信順する。知性に照らされた全煩悩はその面目を全く一新するのである。

三

信仰といえば知性に関係が無いように思われるかも知れないが、真実の信仰ならば必ず知性の照徹がなければならぬ。信仰というのは、仏陀すなわち悟りの開けた人のまことが徹して来た味わいである。まことが徹するという、そのまことというは、仏教では智慧と慈悲のはたらきである。知慧というは知性の深い動きである。

信仰は感情であるという人がある。併し盲目的感情ではない。知性に導かれた感情である。シュライエルマッヘルの宗教論といえば、西洋の宗教論としては有名なものであるが、宗教の本質は直観と感情であると言っている。此の人はいわゆる浪漫派の哲学者であるから、世界を夢のように美しく見ようとする傾向がある。現にこの論の中では、宗教を花嫁の抱擁のようなものであると言い、否抱擁そのものであるとまで言っているが、これは浪漫派の夢のたわ

言であろう。知性に照らし出される人生の姿はそんなに美しい夢のようなものではない。釈尊の悟りの眼に映じ来る人生の姿は、地獄、餓鬼、畜生、修羅などの怒りや、貪りや、愚かさや、嫉みなどの苦しみや迷いの姿である。花嫁の抱擁も餓鬼の貪りの迷いそのものであると諦観せられる。そこに釈尊の徹底的な知性の動きがある。

かように言えば釈尊の悟りの心は血も涙もない冷かな心であると思われるかも知れないが、そうではない。釈尊ほど温かい心を以て此の人生を見られる人は他に類が無いほどであろう。亡き母君マーヤ夫人を慕われる情がそもそも釈尊の出城の第一動機であったろう。いよいよ出城の時、父君浄飯王に対する別離の情、妃ヤシュダラ姫に対する愛憐の情、一子ラゴラに対する哀別の情、それらは如何に深いものがあったであろう。菩提樹下における降魔の場面に出てくる百千の魔は断ち難い愛執の魔ではなかったであろうか。しかも降魔の印相おごそかに、一切の魔が消滅して行くところに釈尊の成道がある。

然らば成道において愛執愛着の百千の煩悩は如何になったであろうか。知性によって煩悩を駆逐せられたのであろうか。いや、前にも述べたとおり一切の煩悩は整えられたのである。整えらるれば煩悩という姿ではなくなる。知性に照らされて調和して真の人間らしさが現れて来る。成道後の釈尊には父君母君は久遠の御親であり、ヤシュダラ姫もラゴラも永遠のまことの道を進む伴侶である。

此の釈尊の御教を仰ぐ仏教徒の信仰であるから、感情ばかりの信仰というものはない。釈尊を仰ぐ仏教徒においては釈尊の知慧が知らず識らずの間に染み込んで来る。釈尊の智慧によって自分の煩悩が照らされるようになる。同時に仏陀の慈悲によって煩悩が照らされるようになる。また仏陀の慈悲によって煩悩が融かされて行く。信仰の上に知性は輝き、隋性は融化する。自分の力で煩悩を転ずることは出来ないかも知れないが、仏力によって結局は転ぜられて行くのである。

四

世には学問を鼻にかける人がある。少しく学問すれば大した物知りになったように思いあがって、宗教などは無知文盲の者が信ずるのであると言って、軽蔑している人がある。これは少しばかり学問した為に、自分の知性を誇っているのである。学問もこんな学問なら止めた方が宜しい。

今日は科学の大進展の時である。原子力の時代である。すべては科学で解決出来る。時代おくれの宗教などは引込んでしまえと考えている。併しその科学はどれだけ世界の秘奥に分け入っているのか。なるほど人間の知性の発展とは云えるであろう。併しながらその発展はどれだけこの世

界、この人生に調和をもたらしているのか。原子力の平和利用というようなことを旗印にして実はお互に争う心を少しも止めていないではないか。地球上に調和の世界はどこにも顕現せられていない。地球上に死の灰が降ったり、放射能の雨が降ったりしている。人類はその進歩した科学の力によってお互に人類絶滅の運命に向っているのではないであろうか。国連は何れの日に世界の国家民族の調和発展を期待し得るのであるか。

こんな有様で学問が何になるか。精神科学の方面でも、倫理学や心理学が進歩して、それでどれだけ人間お互の調和が出来ているのであるか。社会の各層は争い、また争いでいがみ合っている。終戦後二十余年の我が国などでは、世は乱世という有様となって、殺人は至るところに行なわれ、親殺しさえも頻々として出ている。男女も権利を以て相争い、或はまた放縦な恋愛におち入っている。資本家と労働者、国家と官吏さえも毎年我欲のために斗争を繰返している。こんな国家社会に、不徹底な学問をして、その学問ですべてのことを解決しようなどとは、そもそも潜越なことではないか。こんな学問がどうして宗教を否定する力があるだろうか。科学における知性は、これを釈尊の智慧に比ぶれば太陽の前の螢火のようなものである。螢火のような知性による学問を鼻にかけて宗教を軽蔑するなど身のほどしらずというものである。そんな浅薄な知性などは棄ててしまうが宜しい。否棄てる必要は無いかも知れないが、その螢火を太陽の光の前に投げ入れよ。仏教の知性は大包容力を有する。此の大知性、すなはち仏陀の智慧の中に包容せられてこそ、科学進展の知性も真実の用を為すようになるであろう。

親鸞聖人は、学問をしたならばいよいよ如来の御本意を知り、仏陀の悲願の広大なことを信知するようになるものであると仰せられている。この学問というは、西洋伝来の科学についてもあてはまるのである。西洋の科学者でも真にその研究の秘奥に入った人は、かえって宗教に対する敬虔な心を持っているのである。それは人間の力の限界を知ったからである。相対性原理のアインシュタインが日本に来た時、我が近角常観先生の信仰上のお言葉を聴いてびっくりしたということを仄聞（そくぶん）して居る。それは仏教の精神、仏陀の智慧の広大無辺な片端を聴いて驚いたのであろう。さすがはアインシュタインである。相対性原理で信仰の世界を批判したりしないで、仏陀の知性の広大無辺なことを聴いて驚いたところにアインシュタインの価値がある。学問を鼻にかけたり唯物史観を振りまわしたりして、宗教を否定したり軽蔑したりしている人人は、アインシュタインの爪の垢でも煎じてのむがよろしい。

五

浅薄な学問、形式主義の学問が信仰と相触れないということに、いわゆる宗教の学問の上においても著しい。西洋中世のスコラ哲学などが如何に信仰の原理を振りまわしてしかも信仰に触れなかったか。我国においても仏教の教学とか宗乗とかを徒らに学ぶものが、如何に信仰を論ずることが巧みでしかも信仰そのものに触れていないか、これは実に驚くべきものがある。浅薄な知性が宗教信仰の門をとざすのである。

法然上人は、ものも覚えぬ愚かな無智のものが上人の御教をききに参ったものを御覧になっては、決定往生すべしと仰せられてその信仰を認められた。文沙汰してさかしい者が参ったのを御覧になっては、往生如何あらんと仰せられたということであるが、これは中途半端（はんぱ）な知性が信仰の妨（さまた）げになることを言われたものであろう。今日宗門の大学などでは、文沙汰してさかさかしき者を養成しているようであるが、これで仏教が興り立つものであろうか。頗る不安であると言わねばならぬ。法然上人から言えばこれはすべて小賢（こざか）しい知性偏重の者をつくっているので、何れも落第ということになるであろう。仏法は知りそうにもないものが知るぞという蓮如上人の言葉にも無限の味わいがある。この点から云えば筆者自身も落第生の列に入るべきものである。若い時から少しばかり仏典に親しみ、殊に親鸞聖人の御教に生きていると自分では思っている。それで心機転換（しんきてんかん）から五十余年を念仏申して過ごして来ていると言っている。併し元来が小知を振りまわして書いたり言ったりしているのであるから、達人から見られたならば螢が日中に飛んでいるようなものであろう。甚だ慚愧の次第であるが、筆者は正に此のような者である。知性と信仰と言っても、小知の分際で云っていることであるから、達人から見られたならば、さぞ可笑しいことであろうと思う。

併しながら小智の者にも仏陀の智慧は照徹する。そこに小智の者の知性がひろめられ深められるという不思議の事実がある。小智は小智ながらそこに思わぬ仏陀の智慧の光を受ける。小智ながらに仰いで仏教の智慧の光を受け、その大慈悲に融（と）かされて行くのであるから、そこにはたらく知性は単なる小智ではない。むしろ小智の光は打消されて大慈悲の光が輝く。太陽の前に飛んでいる螢であるが、螢の火が消えるところに太陽の光が八紘にかがやくということになる。ここに至れば信仰と知性とは別々ではない。知性は信仰の内面である。知性が広大なる智慧の光の中に入るが故に、その照らすところは心の内の無限の風光である。煩悩に充満している胸の中に照徹して、煩悩のあらゆる姿を明らかにし、その知性の冷たい智のはたらきでなく、無限の温か味を伴っている。信仰と知性とはそこに融け合っていると言ってよろしい。

学問すると云っても学問にこだわらぬ心がここに生れて来る。学問は世間の学問でも仏教の学問でもよろしいが、その学問研究をしていながらいつでも心は脱落しているということが肝要である。学問すれば愚知無知の人よりも人間が悪くなるということをよく心得ているべきである。学問して学問を誇るというようでは駄目である。ソクラテスのように研究すればするほど自分の無知を悟って行くということでなければならぬ。信仰と知性との融合の境地は正にこれである。それは常住に広大無辺の智慧に照らされ慈悲に包まれているが故に、自分の歩みが一歩々々空（くう）に消えて行きながら無限の精進を続けて行くということになる。そこに人生の微妙の味わいがあるのである。

（昭和四十七年五月十二日）

ゲエテの言葉

○

同時代の人ばかりに学ぶことよりも、幾百年経ってもすこしも価値の落ちずに尊敬されているような書を学ばねばならない。

○

自分と性質の似ている者に親しんでそれを友達にするという風な人々と、自分と性質の反対している者と交ってそれから学ぼうという風な人々とある。

○

遠い考えのある人は一日をよく用いることを知る。

○

矢のように過ぎ去る一生涯なのに、或る事に際して、それには自分の年齢が若かすぎるとか、又は老い過ぎているとかで工合の悪いことが沢山ある。

○

多くの人は自分の知っていることについては自慢し、知らないことに対しては驕慢である

○

自分の胸から出たものでなければ人の心をひきつけることは決して出来ない。

信の旅の一里塚

林田英夫

（聖鸞寮誌より）

一　最近の心境

聖鸞寮も第四年生になった。寮誌の発行もこれで第二回目である。寮生の顔ぶれも次々と変ってきた。隣りの知四明寮が閉じられて、京都における唯一の仏教寮になった。願わくばいよいよ発展、本来の面目を発揮せんことを念じてやまない。栄枯盛衰の世の中に、栄を念じ盛を願うのは人情の常であるが。

私は一時寮を出て家庭を持ち、尼崎市の方に就職して居りましたが、家内を亡くし職を辞して、再び京大医学部の病院に大学院学生として研究を続けることになったので、再度入寮させていただき皆様のご指導を仰ぎながら、朝夕ご一緒に生活させていただくようになりました。非常に幸福に感じて居ります。私はここに、外に出て生活して居りました当時の心境の一端を述べさせて頂きたいと思います。

寮の内外にも色々の事が起りました。私自身の上にも僅か二ケ年余りの間に色々の事が踵（くびす）を接しておこった。そして身も心も飛んでしまったように感じられることどもが、卒業、結婚、就職、妻の死、それらのことがアッと云う間に起った。これは〳〵という間もあらせずに。そのために掻き乱され、疲れきった心に、僅かに残された生への執着心のためにやっと世の荒波を通って来たのであった。もし私にあの際お念仏がなかったら、そして念仏がなくっても起ることはおこったに違いなかろうが、と思うと慄然たらざるを得ない。底下の凡夫、煩悩具足の身、苦悩の旧里、のこらず実感させられる。

これを救い、これをたすけるもの、ただ自分に体得せられた念仏より他にない。周囲の人々の励ましの言葉、慰めの言葉はほとんど何らの感動もうけない。馬の耳に風があたっているほどにも感ぜられない。女には見栄がある、男には意気地がある。世の中にはその見栄も意気地もかなぐりすてねばならぬ、否、かなぐり棄てさせられることがある。少くとも一生に一度は、誰しも出会わねばならない。もし無いとすれば、その人は何と貧弱な、薄っぺらな人生

経験しか持たぬ者か。この世は生れてこの世の深さを知らぬのは不幸中の不幸である。こうした意味においては、幸福だったと言い得られる人生経験において、念仏がまこと尊くも頼もしいということをつく〳〵と感ぜさせられた。

過去二ケ年の間は、私は丁度大暴風雨の只中に立っていたような気がする。行けども〳〵はてしない大広原の中央にやって来た旅人が、月もない暗夜に、いつ止むとも知れぬ荒れ狂う大暴風雨に遇った様に思われる。しかし幸いなことには、その旅人は、親のなさけの贈り物の水も洩らさぬ温い外套を身につけ、正確な磁針を持っていた。それによって凍死をまぬかれ、方向を間違うこともなかった。その温い外套こそ信仰であり、その道しるべたる磁針こそ念仏なのである。そしてその暴風とは、盛者必滅、会者定離のことわりさえ悟り得ぬ底下の凡夫、自らのそこはかなき煩悩の苦しみであった。こうした嵐の中にわずかに右に左にとよろめきつつ行く旅人が、過去二ケ年の私の姿と云えよう。

こうした暴風雨も、時と共に次第に静まってきた。光もわずかながらさしそめあたりも明るくなったように思われる。これは極く最近の心境であります。嵐以前の広野と、嵐以后の旅の道とは変っていないが、旅人の心には大きな変化があった筈である。旅人の心にはあらしの恐ろしい印象が暗い影を刻みこんだと同時に、今後再び、或は三度、四度とおそってくるであろう嵐への心がまえが出来ていはしないか。そして又如何なるものが来ようと、そのあらしが如何に烈しかろうと、否、はげしければはげしい程、旅人にはその着ている外套の温かさがより有難く、その磁針の正確さがよりたのもしく感ぜられることであろう。さらば、如何なるものも来らば来れ、我に本願の念仏あり。そは生死を越え、愛欲を越え、時間空間を超え、理性を超え、感情を越えて、すなわち、色即是空、空即是色、永遠流転のわが魂の救いの光である。

歎異抄の中に「慈悲に聖道、浄土のかわりめあり」とし、聖道の慈悲の行きつまりと、浄土の慈悲の未通ることが説いてある。まこと真実の救済は外より与えられるものにあらずして、内より与えられるものである。

外から与えられる慈悲はこの世のたすけにおわる、即ちこの地上の生存五十年を続ける上においてのみ意味がある。

聖道の慈悲は外よりの救済にして未とげ難きもの、たとい未遂げたりとも、すなわちこの世に止まるのみ。人の魂が根底よりゆり動かされる時、魂の力となるものは、魂自身に与えられ、最早魂と一つになれる内在的力となれるものより他にない。この内在的力となるものは、即ち魂に獲

得せられたる念仏である。即ち内よりの救済、浄土の慈悲は、正しくこれである。この慈悲以外まことの慈悲はなくこの慈悲こそ末遂げざるなく、この世を超え、あの世を超え、三世にわたりて救済が行われるものである。

自分を救うものは自分よりないということがここに明らかにされる。即ち自分を救うものは外にある念仏でもない、如来のもとにある念仏でもない。自分自身の魂の中に融け込んで魂の底より湧きおこるその念仏である。念仏も、自己の内在的力とならなければ空しい。

太陽が燦として輝く、その太陽の光の下に、若草が育つ。太陽のもとにある光によるが、その光が若草の真髄に徹して、若草自身と一つになるところ、若草はすく〳〵と生育する。しかも太陽の輝くところ光は必ず若草の髄まで入りみちるのである。前に光を見る時、前なる光はすでに自らの全身を覆うているのみならず、眼底ふかく網膜にやきつけられている。ここに前なる光が、光として受け入れられ、光の価値がここにはじめて発揮される。

我々の前に如来の光明は燦として輝く。この光明を見るもの即ち全身は光明につつまれていることに気づくものはすでに光は心の隅々に入りみちて、不二の姿に隔合し、ここに全き救済が行われる。浄土の慈悲はここに成就せられるのである。

およそ自らの魂に負債を感じない人がこの地上にあるであろうか！もしありとすれば、その人は仏である。仏には念仏やその詮なし。如来の光明をして如来のものに止めしむることなかれ。如来は無限の慈悲の供給者である。魂の負債に泣く者、如来なくしてどうして生きて行けよう。まして「南無とは帰命なり、これまた発願廻向の義なり」とは！わが魂の負債を払わせてくれよと念じ給う如来にあらずや。一河の流、一樹の蔭、この世の肉体の親をさえ子は限りなくしたわしい。まして久遠の魂の親、如来のもとに帰るのは、当然の願いである。

（昭和九年一月）

二　大慈悲

「仏心とは大慈悲これなり」、宗教の世界に眼をむけ多少その方面に関心を抱きはじめた者が第一に抱く疑問は、「仏とは何ぞや、果して仏は存在するや」であろう。この問いに対して端的に与えられたのがこの言葉である。

仏心とは大慈悲である、仏教では慈悲と愛とを区別する普通世間で用うる愛は、愛染とか愛着としてこれを捨て去るが本質に於ては愛も慈悲も同一のものである。愛を転化し全く清純なものとなしきった時に慈悲と呼ばれる。

吾々人間のもち得る最大の愛にてもなおかつ相対的なものであり、交換条件的なものであり、すくなくとも感謝を

期待するもので、真実のものではない。煩悩具足の凡夫がおこす愛は、煩悩より生じ、煩悩にけがされ、そこに執着が起り、濁りに染まる。吾々の住む世界は相対的関係を脱することが出来ないからである。吾々の精神生活もこの相対的関係から出ることが出来ない。

ここに色々の悩み、苦しみが現われて来る。そして悩み苦しみから脱することも出来ない。しかも人間の苦悩が相対的生活から来る以上、とにかく一度これから脱却することがどうしても必要である。そこに宗教があり、念仏がある。相対世界から絶対世界に飛躍してはじめて、一切因縁の流転のままにこれを超え得られるのである。苦悩は苦悩のままに、その苦から脱却し、超越し得られる。因縁の世界のままに一切の因縁を超え相対の世界のままに絶対の世界に入る。

それは非常に至難の道には違いない。このような至難の道がはたして可能であろうか。相対の世界から絶対の世界への道、たとえ通じていても攀じのぼれるであろうか。この道は、はなはだ険難の道であるが、可能な道である。たとえ可能の道であっても凡俗の自分は成し得るであろうか聖人賢者のみに可能の道では、自分には有っても無いも同然である。自分のように智慧の眼閉じ、煩悩熾盛の凡夫にもなおかつ歩み得る道でなければならぬ。

「如来の作願をたずぬれば
　苦悩の有情を捨てずして
　廻向を首（しゆ）としたまいて
　大悲心をば成就せり」

親鸞聖人の讃仰し随順される一道は、慈悲の一道である。念仏は聖人賢者を選ばず、凡愚悪人を問わず、年の老少も言わず、唯信ずる一念に、ひらけきたる世界である。それというのも「お慈悲にて候あいだ信を得べきなり」で、貪瞋、邪偽の只中に、絶対なる力を加えたまうて、相対世界から絶対世界へと開かれるのがこの白道である。

道は開け、道は可能である、しからば如何にして歩み行くことが出来るであろうか。小慈小悲もない身に、如何にしてこの大慈大悲の道を歩み得るであろうか。ここに、如来よりの廻向がある。

闇深きが故に、闇を闇とも知らず、罪深きが故に、罪を罪とも知らず、はてしない流転輪廻する自分に、闇を闇と教え、罪を罪と示し、因縁果の道理に気付かせて、やがてたすかるよすがの絶えて無い自分を、絶対の世界、浄土無為寂静の世界に導き入れて下さる。

まことなるかな、「南無とは帰命なり、またこれ発願廻向の義なり」親の慈悲一つわからぬ自分をして、親の慈悲に感泣せしめるものは何か。師の恩を師の恩とも感じ得ぬ自分に何が師の恩に感泣せしめて下さるのであろうか。育てずんば止まぬ親心があり、教えずんば止まぬ師の御心があるように、凡愚底下の我等を飽くまでも捨てたまわぬ大慈悲心は、五劫の思惟となり、兆載永劫の御苦労が重ねられる。

我等の五逆謗法の身に、泥田に開く蓮華のように、一輪の念仏の花の開く裏に永劫に貫ぬく阿弥陀仏の御苦労がある。ひとえに他力のもようしによる。（昭和九年十二月）

念仏詩抄

木村無相

歎異抄拝読五十年

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」と信じて、「念仏申さん」とおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり　（第一章、第一節）

歎異抄拝読五十年――
濁悪の身にのこりしは
「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり――」
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて

「往生をばとぐる」は誓願不思議のゆえ
「と信じて」も誓願不思議
「念仏申さんとおもいたつこころのおこる」も誓願不思議。
、摂取不捨の利益にあずけしめたまう」も誓願不思議。
ああ
誓願不思議
誓願不思議

× × ×

「往生」
「信心」
「念仏」
「摂取不捨の利益」
それらのすべてが
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて
弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて

× × ×

「往相」というも誓願不思議
「還相」というも誓願不思議
「真実の道」というも誓願不思議

「方便の道」というも誓願不思議
ああ
浄土真宗、誓願の宗教――
親鸞聖人、御和讃に
生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

弥陀の本願信ずべし
本願信ずる人はみな
摂取不捨の利益（りやく）にて
無上覚（むじょうかく）をばさとるなり

× × ×

歎異抄拝読五十年――
愚悪のわれにのこりしは
ただ誓願の御不思議一つ――
ただ念仏のほか無かり
ただ念仏のほか無かり

（昭和四六年、六十八歳の日に）

× × ×

まかせまいらせ

〃ただ如来の誓願に
まかせまいらせ
たまうべく候
とかくの
御はからい
あるべからず
候うなり〃

聖人さまの
おんさとし

あかるい

やっと
でました
一本道
ナムアミダブツの
一本道

西の空
あかるい

ささやき

くらきにあって
ささやくもの
それはねんぶつ

（昭和四六年四月一日）

念々照らして

八万四千のぼんのうの
かたまりこそが
このわたし

八万四千の光明の
いちいちこそが
ナムアミダ

念々ぼんのう
このわたし
念々照らして
ナムアミダ

ナムアミダブツ
ナムアミダ

しらぬは

しらぬがほとけと
いうけれど

しらぬはぼんぶで
ありましょう

〃摂取心光常照護〃

おやさまいつも
まもりずめ

それが

わたしのいちばん
ふかみにあって
わたしをいつも
呼びつづけるもの

ねんぶつ
わんぶつ
それが
ねんぶつ

（四六、四、五日）

浄土について

花田正夫

一　私のための浄土

私どもが仏典をいただく時、親は子になくつてはならぬことに苦労するように、如来は私どもになくつてはならぬ、またそれ一つで満足できることのためにかかりはてて下さるという一事をまず銘記せねばならぬ。親鸞聖人が「他力の悲願はかくの如き（煩悩具足の凡夫）のわれらがためなりけりとしられていよいよたのもしくおぼゆるなり」とも、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちたまいける本願のかたじけなさよ」と常に随喜されているのは、わが御身にかけて、そのことをお知らせくださるのである。

浄土を建立して下さったのも、よそごとではない。私共を導き迎えて成仏せしめようための如来大悲の顕現であり私のために建立下された浄土であるという真実を知らねばならぬ。

聖人は浄土を無量光明土とも、大悲の誓願にむくいて現れた真実の報土とも云われている。煩悩具足の私どもが悪縁に遭うてつくりだした罪障のおもみに、沈みきって浮ぶ瀬のない苦悩の姿をみそなわす如来は、それを御自身の責任とされて、大慈大悲のみこころから浄土を荘厳せられて愚悪の私どもを引接（いんじょう）して下さるのである。

あたかも、法華経の長者窮児の譬に示されてあるように、親を捨てて長の年月放浪し、親をも家をも忘れはてたうらぶれの独り子のために、財宝を積み家をつくり、ひたすらにその帰りを待つ長者の心に象徴せられる。

さて、諺言に「麻のなかの蓬（よもぎ）は直い」というが、事毎に惑い苦しみ失敗を続け、何時までたってもひとり立ちの出来ぬ私どものために、如来は清浄な光明土を成就し、そこに迎え入れて、枉（まが）れる私共を直（なを）うして浄土のさとりを開かしてくださるのである。

しかし自分の力をたのみ、未来の幻影を追って、いつかわよくなれようと、見はてぬ夢を追い続けている間は、浄土建立のご苦労も他人事と聞きながす。ところが自分で自

分の始末のつかぬ身と知らされるとき、まさしく「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と感佩（かんぱい）し、それをそれとも気づかずに居たことの愚かさを愧じ、この者をあくまでも憐れみ続けて下さる海山の御恩を謝しまつるばかりである。

二 浄土の往生

（心往生、身往生）

つぎに、この往土の浄生について、聖人は、心往生と身往生の二つをあげられている。心往生とは、「ひごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、ひごろのこころにては往生かなうべからずと思いて、本のこころをひきかえて本願をたのみまいらするをこそ廻心とは申し候え」とある。たとえば、迷い児が雑踏のなかで親に見出された喜びになぞらえられる。何を見ても、誰に呼ばれても満たされない迷い児も、生みの親の呼び声が聞えた時、大きな歓びのなかに、親が子を呼び子が親を呼びつつ、前になり後ろになりして、自身の業道に随順しながら親の家に帰るのである。

身往生とは、「いかにいわんや戒行・慧解（えげ）ともに無しといえども、弥陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものならば、煩悩の黒雲はやくはれ、法性の覚月（かくげつ）すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして一切の生を利益せんときにこそさとりには候え」とも「浄土真宗には今生に本願を信じて彼土にしてさとりをばひらくとこそならい候うぞ」と教えられている。私どもがいよいよ煩悩の穢身と別れる時で、願土にいたるや否や罪障はのこらず仏力に転化されて功徳の潮と一味となり、自然に仏のさとりの華がひらけ、仏と一味のはたらきに入らして下さるのである。この広大無辺な無碍の光明界は、現実ではこころもことばもおよびもつかぬことであるが、そうした世界をわがついの住み家として恵まれることはたのもしいかぎりである。

豊後（ぶんご）の天才音楽家の滝廉太郎さんの詩に、

すずめすずめ今日もまた、
暗い野道を　ただひとり
林の奥の竹藪の
淋しいお家へかえるのか
いえいえ皆さん　あそこには
父さま　母さま
待っていて
楽しいおうちがありまする
左様なら皆さん
チュウ　チュウ　チュウ

とある。この詩情は、信を行く旅人の心境そのままである。私どもはまことに鈍感であるが、よき師、よき信友、そして肉親にさきだたれた悲しみが機縁となって、浄土は私にとってだんだん親しい、にぎやかなところとなった。

やがて私も浄土のさとりを開かせていただく暁には、聖人たちと尽未来際かけて一味のうしおにとけさしていただけると聞くにつけ、やがて一切の世々生々の父母兄弟と共に法味をともに愛楽（あいぎょう）させていただける道の開かれていることのありがたさに、私共の一切の願いも満たされるのである。

往生即成仏とは、往生即新生である。或死刑囚が不思議な御縁から深く念仏をよろこび、此世の別れの時、教務課長さんに御礼を云ったあと「この世ではひとりで出入りも出来ませんでしたが、お浄土に還って自在な身となり、存分におわびと御報謝をさせていただきます。新しい出発です云々」と云いのこしたと聞く、地上一切の光の消える時浄土のひかりはいよいよかがやくのである。

浅原才市翁のうたに

才市いくつになった
六十七になった
この世の日の暮れは
あの世の夜明けなり
御恩うれしや南無阿弥陀仏

と、願力自然にひらかれるあの世の夜明けを仰いでいる。

四十七年三月三日

心に刻まれた言葉

○

五・一五事件で政府の大官や財界の大物が、血盟団の革命的暴挙で凶刀に倒れた。その盟主の井上日召は日蓮宗の熱烈な行者であったが、獄中にあって、歎異抄を読み、特に第二章を「夜が明けた境地」と讃えている。獄中の歌は、

わが魂を抱きたまえりあたたかく　大いなる御手、親鸞という。

○

共産主義のすぐれた学者であり、且つその実践者であった早稲田大学の元教授の佐野学氏は、自ら告白して、学問して理窟はよくわかった。

しかし、佐野学自身はどうなる。

私を救うものは弥陀の本願しかない。

と言っている。きびしい人間のギリギリの場である。

「歎異抄と私」のテレビ視聴記、二つ

一

北岡行男

四月三十日、朝の教育テレビ宗教講座は一期の機会、これを逸しては生涯の悔いと思い定めて、前夜から目覚時計をかけて置いて午前五時起床、洗面、身繕いを終えて、六時かっきり妻といっしょにテレビの前に椅坐しました。

画面に池山寿夫氏、花田氏、川畑氏、山田氏、の四人の大写し、次いで池山栄吉先生の半身像が大きく画面に映し出され、続いて、六高時代、甲南高校時代のお元気なお姿と、京大学友会館でのありし日の講演壇上の先生のお姿があらわれる。

川畑愛義氏の司会により、四人が交々語り、それぞれ歎異抄を中心とした他力信仰の持味を話される。談話に関連して歎異抄の章句が画面に映し出される。

○親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せを……

いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし——

○善人なおもて往生を遂ぐ、いかにいわんや悪人おや

○わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱（にゆうわにんにく）のこころもいでくべし

○ひとえに弥陀のおんもよおしにあずかりて念仏申し候人をわが弟子と申す事きわめたるて荒涼のことなり。親鸞弟子一人ももたずそうろう

○弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思し召したちける本願のかたじけなさよ。

○よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

坐談は静かにスムースに運ばれる。心奥から吐露される体験の機微、仰ぐ心地、心に浸み透ってくる洪大なお慈悲、たまわりたる信心。恩師を源流として、四人を通し他

力信仰のエキスが伝ってくる。

画面から静かな法悦が流れてくる。如来の大慈大悲心が親鸞聖人、池山先生、その四人の高弟を介して、今画面から湧き出てくる思いである。

信仰の醍醐味に浸りつつ正味一時間の放送がまたたく間にすんでしまった。私の胸底の余燼のような信心もほのかに燃えあがった。傍の妻の目にも光るものがあった。

× × ×

育（はぐく）まれ四人交々（こもこも）歎異抄　語ろう
テレビ師もみそなわせ
顔（かんばせ）もお声もそっくり師に似たる御（み）子
はテレビに出でましたまう
師を継いで仏を説いて五十年　その顔（かんばせ）の深
く和（なご）めり
臨終の師の脈とりしくすしはも師を讃う会、滑（な）め
にすすむる
歎異抄世に弘めんと師弟はも　独仏（ドクフツ）訳を遂
げたまいけり

× × ×

ゆく春や　テレビ画面の　坐談会
春暁や　こもごも語る　歎異抄
師を語り　信を讃えて　春惜む

信心は　浸み込む味や　春の雨
おのずから　咲くを待とうよ　春の蘭
春愁の　溶けて悦び　とはなりぬ
信仰は　たまわるものぞ　余花の雨
信仰は　浸み入る力　夏近し

四十七年五月一日　紀伊田辺にて

二

森田正勝

……今日宗教のテレビの時間を妻といっしょに視聴させていただきました。

「自分で悪人と気づくのではなく仏の慈悲のあたたかさにつつみとられて、はじめて悪人でしたとなるのです」とお聞きし、何時の間にか自分勝手に歎異抄を読んでいたことを知らされおどろきました。

「地獄は一定すみかぞかし」

その他すべて自分の全部が、あたたかくつつみとられてはじめて転じられ、自分のはからいで「どうする、こうする」のではなかったと再び深く気づかされました。

四十七年五月二日

あとがき

終戦以来きびしい対立と抗争を続けて来た米、ソ両国の首脳が会見している。これには色々の原因もあろうが、私は昔ダウインの弱肉強食的自然陶治と、クロバトキンの相互扶助論を聞いて、この矛盾対立する二つは同時に存在する事実と思った。最近では共存共栄が段々強く叫ばれてきているが同時に対立抗争はきびしい。この矛盾した世に生きて行くことはむつかしい。右によれば左の反対があり、左によれば右の攻撃がある。かと云って日和見は許されないし、双方に上手をして漁夫の利をしめる蝙蝠的生活は必ず破綻をまぬかれない。水火相交わる二河白道の一地点のそのままである、個々の人がこれを越えねばならぬように国家社会もこれを越えねばならぬ。この大暗黒裡にひびくものは「汝一心正念にして直ちに来れ、我れ能く汝を護らん、すべて水火の難に随することを畏れざれ」の如来招喚の声ばかりである。

× × ×

深心の近角先生の御懇説は、相対の我々のはからいはすべて五十歩百歩で、浅いというも深いというも、すべて浅薄なものにすぎぬ。仏智のしろしめすところに真の深さがあり、それをはからいなく信受させて頂くところに心の底の闇も破られることを教えられる。

福島先生は仏智を根底とする仏教の真意を明示して下さいました。如来は智慧、慈悲、方便をもって限りなく衆生を救いとげて下さるのである。

林田英夫さんは、今度の大戦に軍医として出征、沖縄で戦死せられた、惜しい人であった。聖鸞寮誌にのこった遺文を掲げて、沖縄復帰の記念とさせて貰った。

四月三十日に、宗教テレビで「歎異抄と私」の題で四人が対談したものを紀州田辺市で視聴された北岡さんが感想文を下さる、北岡さんは六高時代からの信の友で、池山先生を生涯の師とされる方である。

五月のはじめに私は二十年振りに郷里岡山に帰り、光清寺の落成記念に出席し、中旬から肺炎となり、やっと恢復に向い、本号の編集をすませたようなことで、四月に桑名市での「親鸞に聴く」会に出した「浄土について」の原稿をそのまゝ載せて読んで頂くことにしました。来月からは本通りに例会もはじめますので御休心下さい。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午后一時半。南区駈町二ノ八八、一道会館、例会。市電、新郊通り一丁目下車。東入ル、三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前・午后。昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電御器所通り下車。市バス北山下車。

急告

○ 七月第二日曜は休講

定価 半年 四〇〇円（送共）
一年 八〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光 第二十四巻 第六号 昭和四十七年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可